

3. 身近なところで起きる内水氾濫に対して関心を

最近、都市部での豪雨や台風による氾濫や浸水が発生することが多くなってきているようです。これは雨量が多くなっているというほかに、いわゆる内水氾濫が多発するようになってきたようです。これは、地面が降雨を浸透させる働きが低下していることに加えて、排水系が十分に機能しなくなっていることに原因があります。よく、被害にあった人が水の上昇は一瞬だったといわれるのはこのような状況を示しているものと思われます。このような内水氾濫は、もちろんハード対策によって抑制していく必要はありますが、加えて大事なことは被害を忘れないことだと思います。被害のエリアは今後もその傾向にあるわけで、災害の状況を記憶して伝えていくこと、あるいは自分自身が降雨時の行動に慎重になることで早めの避難につながりますし、さまざまな屋外における事故防止になっていくと思います。また、内水氾濫には常習性がありますので、過去の事例とともにハザードマップでの確認を怠らずに、早めの避難を心がけるようにしたいものです。

豪雨時に、自分だけは大丈夫とか川の近くでないなどの理由で避難が遅れると、周りが浸水して避難の手段がなくなることとなります。避難は必ずしも、外に出て避難所に向かうことだけではありません。建物が2階以上で河岸から遠い、がけを背負っていないところであれば十分なことも多いと思います。日ごろから、備えておくという慎重さが大事なことです。私たちの生活環境は利便性、公衆衛生の維持、生活環境の向上といった時代の変化を受けて技術成果により快適になりつつあります。しかし、それによる負の面、リスクも同時に考えておかないといけないわけで、それには広い視野で俯瞰するということが極めて大切なこととなります。

内水氾濫は排水が十分に機能しないで、河川へ流れ出ないことや時間差なく流下するといったことで発生します。これに対して、様々な対応がなされてはいますが、コストも時間もかかるので、一気に解決へとはならないのが現実です。まずは、私たちはこれまでの履歴状況をしっかりと記憶して、備えを忘れないことが大切なこととなります。

また、内水氾濫のような直接的な水害ではありませんが、最近では地表水や地下水、埋設構造物の劣化などによる道路の陥没、法面崩壊が見られます。これらは突発性でもあり危険性が高いものです。加えて、道路等のアンダーパス部での浸水による事故も多発しています。これは凹部への地表水の貯留ですが比較的短時間に集水してくるということからも注意が必要になります。加えて、出水した後では、様々な被害が続きますので、地域のリスクをハザードマップで確認しておくことも大切なことです。想定外をなくすためにも、まずは地域事情を把握して、リスクを理解することが必要になります。